札幌市教育文化会館情報誌「らく」 2018年3月発行

らく

vol. 45

sapporo
education and culture hall
news
raku

BUNRAKU
SEMINAR
5.3 thu.

人間国宝・吉田和生が語る文楽の世界

［特集］文楽セミナー

札幌市教育文化会館

特集

［文楽セミナー］

人間国宝・吉田和生が語る文楽の世界

文楽初心者でも気軽に文楽の魅力に触れることができると好評の文楽セミナー。5月3日の開催に先駆けて、文楽の基本的な豆知識や、講師を務める人間国宝・吉田和生さんのインタビューをどうぞお楽しみください！

文楽人形の首（かしら）

人形浄瑠璃の発生当初は、新作が上演されるたびに役に応じた首が作られていましたが、次第に同じような役には決まった首を使い回すように。同じ首でも、役柄によって眉や目、口、肌の色などに細かく変更を加えて使われます。

ガブ
gabu
鬼女などに使われる。仕掛け糸を引くと、清楚な姫が金目、口裂けに。

傾城
keisei
位の高い遊女。立兵庫という髪に結い、豪華な髪飾りをつける。

鬼一
kiichi
剛直に見えるが、うちに慈愛を秘めているといった、主役級の老武士の役に使われる。

文七
bunshichi
文楽を代表する主役級の首。男らしさの中にも憂いを含んだ表情で主人公に最適。

検非違使
kenbishi
真一文字に結んだ口が特徴。さまざまな種類があり、主役から脇役まで幅広くカバーする。

娘
musume
12歳から18歳くらいまでの未婚の女性に使われる。文楽の首の中では最も美しく、可愛らしい。

文楽は三業による総合芸術

～太夫・三味線・人形遣いが、それぞれの力量と技術を結集！

三業とは太夫・三味線・人形遣いのこと。
正面の舞台には人形遣い、客席へ張り出した上手側には太夫と三味線。文楽の舞台は、この三業が絡み合いながらドラマを展開していきます。

人形遣い

文楽は世界の人形劇の中でも珍しい「三人遣い」。一体の人形を、主遣い（頭と右手）、左遣い（左手）、足遣い（両足）の三人で操る。三つの部位がシンクロするように操るためにはかなりの技術と修練が必要で、「足10年、左10年」と言われる。

太夫

登場人物の全てを一人で語りわけ、光景や状況まで明らかにする太夫は、いわば舞台をリードする存在。床本（脚本のこと）は太夫にとって生命のようなもので、舞台に上がると語る前に目の高さに掲げ、礼の心を示す。長い演目は太夫が交代で行う。

三味線

夫婦にも例えられる太夫と息を合わせて、喜怒哀楽から情景描写までを表現。そのため、楽譜だけでなく、太夫の語る言葉や間合いも記憶している。義太夫節を弾きこなすと、かなり楽器を消耗するため、胴の皮は一公演ごとに張り替えるという。

［インタビュー］

人間国宝 吉田和生

「人間がすることを人形を通してみせる」ことが、文楽の一番の魅力です。

――人間国宝ご認定おめでとうございます。お知らせが届いた時のことをお聞かせください。

昨年の6月30日に自宅へ電話があり、内定の内示をいただきました。次の日、師匠（故吉田文雀師）のお墓参りをして墓前で報告しましたら、「お前で大丈夫か？」と師匠に言われているようで（苦笑）。左遣い、足遣いに助けられ、舞台で太夫さん、三味線さんに助けられて、そして何より観ていただけるお客様あってこそ。たくさんの方々のおかげで頂いたものですから、皆さまに深く感謝あるのみ。正直戸惑っていますが、人間国宝になったからといって急に上手くなるわけではないので、今までの積み重ねを精進し、更にもう一つ積み重ねていこうと思っています。

――文楽生活を続けてこられた原動力は何でしょうか

愛媛で文楽とは全く縁なく育ちました。19歳で関西へ来て、思ってもいなかった文楽の世界に。内弟子時代、おやっさん（文雀師匠）はどこへでもお供させてもらい、おかみさんは実の子のように接していただきました。厳しくもとても温かかった。人形を遣うことが楽しいというのではないが、苦しくてもやるのがプロ。続けてこられたのは、お客様の温かい拍手があったからこそです。数ある舞台で思い出深いのは、２００４年『妹背山女庭訓』の久我之助役を演じた公演。中日を過ぎた頃、師匠が「昨日浅草で買ってきた」と言って初めて帯を贈ってくれました。『ようやっている』とは言われませんでしたが、師匠なりの及第点ということだったのでしょう。

――文楽の魅力は何でしょうか？

一番は「人間がすることを人形を通してみせる」こと。太夫・三味線が音の世界をつくり、人形が映像をつくる。義太夫（大夫・三味線）と人形が呼吸を併せてドラマを展開していく舞台を、お客様が観て楽しむ――これが「文楽」。４００年も延々と続いてきた日本の伝統芸能・文楽、この世界に入った者は次の世代へ「文楽」を伝えていく義務があります。文楽の歴史、人形の仕組み、舞台の構造、文楽を通じて学ぶ「上方文化」や「日本の伝統文化」。文楽には計り知れない魅力があります。文楽への恩返しに、もうひと踏ん張り。技量を落とすことなく文楽の魅力を後世につないでいきたい。

――５月の「文楽セミナー」ではどのようなお話を？

今回は、「文楽人形の手・足」についてお話させていただきます。人形の仕組みには、目や口が動くしかけのある首（かしら）、そして人形の「手・足」があります。手・足と胴は、人形遣いがそれぞれ個人持ちで、登場人物によっていろいろな使い分けをいたします。普段、舞台を見ているだけではわからない人形の「手・足」の解説をお楽しみに！

――第２部で上演する『壺坂観音霊験記』の見所は？

『壺坂観音霊験記』は１８７９年（明治12）に初演され、ストーリーもわかりやすく節付けも優れていたことから好評を博し、人気曲となった演目です。座頭の沢市と妻お里の夫婦愛と観音菩薩の霊験が描かれている物語です。皆さんも一度は聞いたことがある「三つ違いの兄さんと…」という名文句が出てきます。夫婦の人間描写に工夫を凝らした演奏と人情豊かな人形の動きに、ぜひご注目ください。

――札幌、また北海道について、何か思い出や特別な印象はありますか？

旭川、十勝、帯広、小樽、函館…北海道の各地へ巡業等で行ったことがあります。もちろん北海道の豊かな肉や魚に海産物、野菜を食べるのが楽しみなことではありますが、やはり広い大地、地平線の目線で見渡せるのは北海道ならではの景色です。すばらしい景色を見ながら、新鮮なバターをのせた北海道のジャガイモの味は格別ですね（笑）

――最後に、読者へメッセージをお願いいたします。

文楽セミナーでは、文楽を司る舞台裏の様々なことを解説した後に演目を観ていただきます。裏話を知って、お客様自身が〝文楽の魅力〟を見出していただければ。ぜひご来場いただいて、新たな「文楽の魅力」を発見してみてください。

人形浄瑠璃文楽座
人形遣い

吉田 和生
（よしだ かずお）

昭和42年7月、文楽協会人形部研究生となる。同年、吉田文雀に入門し、吉田和生と名のる。翌年4月、大阪毎日ホールにて初舞台。平成29年10月 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。

2018年

教文伝統芸能シリーズ

札幌市教育文化会館では能舞台や歌舞伎の花道などを活かし、
日本の伝統芸能を紹介する「教文古典芸能シリーズ」を開催してきました。
2011年度より能の五流派をみくらべる公演やレクチャーを、2016年度は能楽に現代美術をプラスした『noh play』、
2017年度は能の名作『松風―見留―』を上演しました。今年度より「教文伝統芸能シリーズ」と名称を改めて、
次世代へ向けて伝統芸能を継承するプログラムに精力的に取り組んでいきます。

文楽セミナー
人間国宝・吉田和生が語る文楽の世界

２０１７年１０月に人間国宝に認定された人形浄瑠璃文楽座技芸員の吉田和生師が、認定後北海道での初めての公演です。

『壺坂観音霊験記』沢市内より山の段
写真：三宅晟介

［日　時］　5月3日（木・祝）13:30開演（13:00開場）
［会　場］　小ホール
［料　金］　全席自由 3,000円（教文ホールメイト2,500円）
U-25席　1,500円（25歳以下限定）
［チケット］　教文・大丸プレイガイド、ローソン、ぴあにて3月15日（木）より発売

［プログラム］

第１部　吉田和生の文楽舞台裏話
～三業（太夫・三味線・人形）の文楽舞台裏話～

人　形　「文楽人形の手・足」吉田和生（人形浄瑠璃文楽座・人形）
太　夫　「感情豊かな浄瑠璃」豊竹希太夫（人形浄瑠璃文楽座・太夫）
三味線　「太棹の響き」鶴澤清丈（人形浄瑠璃文楽座・三味線）

第２部　上演『壺坂観音霊験記』
沢市内より山の段

太　夫　豊竹希太夫
三味線　鶴澤清丈
人　形　吉田和生、吉田玉佳、吉田玉勢、吉田玉誉、
吉田和馬、吉田玉路、吉田和登

松竹大歌舞伎

明朗で華やかな曲調と娘心を描くクドキ、長い布晒を使っての力強くもたおやかな踊りがみどころの、「近江のお兼」をはじめとした全3演目をお楽しみください。

［日　時］　7月5日（木）昼の部 13:30開演（12:45開場）
夜の部 18:00開演（17:15開場）
［会　場］　大ホール
［出　演］　尾上菊之助、坂東彦三郎、中村梅枝、市川團蔵　ほか
［演　目］　「近江のお兼」、「曽我綉侠御所染」、「高坏」

教文伝統芸能シリーズ
「能楽なう」

京都を代表する能楽師を招き、能楽公演を行います。

［日　時］　6月12日（火）18:30開演（17:45開場）
［会　場］　大ホール
［演　目］　宝生流能「藤戸」、大蔵流狂言「口真似」、
観世流能「善界 白頭」
［出　演］　小倉健太郎、林宗一郎　ほか

野村萬斎スーパー狂言ライブ

2009年以来10年ぶりとなる野村萬斎スーパー狂言ライブ。照明やCG（コンピュータ・グラフィック）を取り入れた、古典芸能の枠を超越した新しい狂言を上演します。

［日　時］　8月31日（金）19:00開演（18:00開場）
9月　1日（土）14:00開演（13:00開場）
［会　場］　大ホール　　［出　演］野村萬斎 ほか
［演　目］「三番叟」、「彦一ばなし」

人形浄瑠璃文楽

『すしや』、『道行初音旅』、『野崎村』と名作揃い。ファンの方もはじめての方も伝統芸能を心から愉しめる一日です！

［日　時］　１０月１５日（月）
昼の部 13:30開演（13:00開場）
夜の部 18:30開演（18:00開場）
［会　場］　大ホール
［演　目］　昼の部　義経千本桜 椎の木の段・すしやの段
夜の部　義経千本桜 道行初音旅　新版歌祭文 野崎村の段

文楽セミナーを除く全公演、教文ホールメイト先行予約を予定

石の塔が立つとある国境……
そこで起きた戦争と愛に振り回される人々と
石たちの記憶を巡る
かつてない物語に27名が挑む！

3月25日（日）開演13:30（開場13:00）
札幌市教育文化会館　小ホール

チケット
全席自由　一般1,500円　中学生以下1,000円

※未就学児はご入場いただけません。
※車いすご利用のお客様は前日までに教文プレイガイドまでご連絡ください。
※会場にはお客様用の駐車場はございません。
お近くの有料駐車場をご利用ください。

チケット取扱
教文プレイガイド　TEL.011-271-3355
大丸プレイガイド（南1西3）　TEL.011-221-3900
CoRichチケット予約　https://ticket.corich.jp/apply/88349

［問い合わせ先］
札幌市教育文化会館事業課
TEL.011-271-5822（9:00～17:00）※第2、4月曜日は休館日

潤色・演出
南　参

この「ローリング・ストーン」という物語の中で、「人は石から生まれた」という台詞がある。ダーウィンも真っ青の超進化論だ。そんなバカなと思いながら苦笑いして見ている内に、いつの間にか頭がからめとられ「本当に人間は石と紙一重なのかもしれない」と思わされてしまう。そんな劇を本気でつくる。その過程で大人も子供もない。なにせ「大人は子供から生まれた」のだから。

■子ども演劇ワークショップ

昨年の「わが町」子ども向け演劇ワークショップに引き続き、ワークショップ講師・演出を劇団「yhs」の南参氏が担当。小学校4年生から中学校3年生までの20名の子どもたちが集まり、3月の発表公演に向けて演劇作品を作り上げる喜びと、自己表現の楽しさを体験しました。

「子ども演劇ワークショップ」の様子

八十嶋 悠介から指名→

さっぽろ演劇人

No.012

畠山由貴（はたけやま ゆうき）

初日の、幕が開ける瞬間の緊張感が好き

畠山由貴
プロフィール

劇団パーソンズ主宰／作家・演出家
2010年、専門学校札幌ビジュアルアーツ パフォーマンス学科 舞台演出専攻卒業。同年、同期と共に、劇団パーソンズを立ち上げる。劇団のメンバーは脚本・演出担当の畠山の他、所属女優4名、男優1名の6名で構成されている。

劇団パーソンズ第10回公演『海月と睫毛』

SAPPORO ENGEKIJIN
YUKI HATAKEYAMA

専門学校で舞台演出について学び、同期のメンバーと立ち上げた劇団パーソンズは2012年にTGRの新人賞を受賞。最新作『海月と睫毛』では、悲しみの中に微かな希望を感じさせるラストが好評を得た畠山由貴さん。活動8年目を迎えた彼女が次に目指すものとは？

――劇団を立ち上げた経緯から教えてください。

専門学校の2年次に行うコンカリーニョでの発表公演が、自分にとって初作品でした。終演後、たくさんのお客さんが泣いてくれているのを見て、「自分たちのつくったもので人の感情を動かしたんだ！」ってとても感動して。先生も「お前は劇団を立ち上げた方がいい」と言ってくださって、これはもうやるしかないなと。

――転機となる出来事は？

泊篤志さん（「飛ぶ劇場」代表）の戯曲講座で、シーンを生かす会話の積み重ね方など具体的に教えてもらったこと。受講後に書いた『私たちの賞味期限』（2013年）は、TGRで審査員奨励賞をいただきました。それ以来、自分の中で戯曲の書き方や好きな芝居のタッチも、結構変わった気がします。エンターテイメント性より、舞台上の人たちが普通に生活しているような空間を、より求めるようになったかな。

――結成8年目ということで、中堅の域に入ってきましたね。

昨年19歳の子と一緒に作品をつくったとき、自分はもう若手ではないなと自覚しました（笑）。少なくとも、勢いだけで勝負できる時期は終わったな、と。最近は、「～賞」みたいな確かな評価を残せていないことにも苛まれていて…。もっと勉強して、技術をつける必要があると痛感しています。

――活動を続ける上で避けられない壁ですね。

何回かこういうのを乗り越えてきたなって、何だか懐かしいです。最初の壁にぶち当たったのは、TGRの新人賞が全然とれなかった時期で、必死の気持ちで挑んだ3年目にようやくとれた。2018年は今のところ自作を発表する予定がないので、まずはシェイクスピアなどの古典を読んで勉強しながら、じっくり台本を書き上げてみようと思っています。

――畠山さんにとって演劇をつくる楽しさとは？

初日の開演直前、だんだん照明がフェードアウトして暗転し、パッと舞台上が明るくなる瞬間がすごく好きなんです。お客さんがグッと舞台に集中して、空気が締まる瞬間の緊張感がとても良くて。あのドキドキを求めて、演劇をつくり続けているのだと思います。

◎次回公演情報 | 2018年11月に、ターミナルプラザことにパトスで演出作品を上演予定